
恋姫異文録 魏史陽影紀

桜悪夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫異文録 魏史陽影紀

【Nコード】

N1006S

【作者名】

桜悪夢

【あらすじ】

気分転換（現実逃避）作品。

序章 胡蝶の夢

赤く、紅く、朱く、緋く、夕暮れのように染まる蒼天。

染め上げるのは熾火を纏い燃え盛る巨城。

その姿は“落日”の如く。

玉座に鎮座する少女。

少女の傍らには横たわり、微動だにせぬ十四の影。

聞こえるは熾る焰の慟哭。

無音とは異なる静寂。

その中に、コツ、コツ…と足音が響く。

少女はゆっくりと瞼を開け感情の無い冷淡な顔をして“帰還者”を見詰める。

「……………終わった？」

「ああ…後は俺達だけだ」

「そう…」

不意に少女は顔を綻ばせ、小さく吐息を溢す。

穏やかな眼差しで眠る影をゆっくりと見回す。

共に戦い、散って逝った。

最後の一瞬まで諦める事も臆する事も無かった者達。

「私達は敗けた…」

けれど、我等が魂魄は一片たりとも渡しはしないわ
だつて——」

そう言つて瞼を閉じた後、ゆっくりと開き…

「——私は欲張りなもの」

少女は無邪気に微笑む。

その微笑みは死を迎え様としている者とは思えない。

最後の一瞬まで自分らしく在り続け様とする故か。

見ている此方まで口元には笑みが浮かんでくる。

「■■も■■も倒れた…」

私達だけで持ち堪えられた方かしら？」

少女は戯れに訊ねる。

「どうだろうな…」

勝つ事だけに集中すれば、勝機が全く無かったって訳じゃないからな…

正直、難しい所だよ」

“もしも…”なんて考えは結末を迎えたから浮かんだに過ぎず…

「けれど、その勝利は私達の歩んだ道を外れる事…
それだけは——赦さない」

故に誰一人として道を踏み外した者は居ない。

敗けては、死んでは意味が無いと言う者も居る。

しかし、誇りを捨てた道に何の価値が有るだろう。

喻え愚かしいと評され様と己が歩む道を貫く――
それが誇りに殉じる事。

それが共に歩み、志半ばで散って逝った者達に対する唯一つの手向け。

彼等の死が、散らした命は無意味ではなかったのだと天へと示す為にも。

「そうだな…

それが俺達の歩んだ道だ」

“道”は此処で終わる。

死にたくはないが…

それでも、己の誇りを貫き死を迎えるのだから…
何も恥じる事は無い。

己が“生”を天へ向かい、高らかに謳い挙げられる。

少女と微笑み合う。

『聞け、天よっ！

我、歩みし道にただ一片の外道無しっ！

我が生き様に恥無き事を、業火を以て照覧あれっ！』

誰よりも気高く――
二人は声を上げた。

暫しの静寂。

昂りの余韻に浸りながら、互いを見詰め合う。

「……………ねえ…
貴男はどうなるのかしら？
莊周の“胡蝶”の様に…
ただ、夢から覚めるの？」

少女は“いつか”の会話を思い出しながら訊ねる。

「…さあ、どうかな…
俺にも判らないよ
でもまあ、夢だと言っならもう少し位、都合良く事が運んで欲しか
ったかな
好きな女の子に格好良い所見せたかったし」

肩を竦め、戯けて答える。

悲観や未練は似合わないとばかりに笑って見せる。

「そう？

私は十分に格好良い貴男を見ているのだけど？」

少女も同意する様に笑う。

この雰囲気心地好い。

「男と女じゃ其処の定義は違うからだよ……多分」

そう言って、自信無さげに苦笑する。

互いに目を細めた。

夢から覚める――

そんな事は望まない。

少女と共に迎える終焉。
ただ、それだけを望む。

不意に少女の瞳が揺れる。

「……ねえ、もしも…

もしも、“終端”の果てに貴男が夢から覚めて…
もう一度…“胡蝶”として夢を見られたなら…
その時は――」

儚く憂う少女の蒼い双眸が真っ直ぐに見詰める。

「

」

少女は溢れる想いの全てをその一言に託す。

真っ直ぐで、純真無垢な、穢れ無き、一途な想い。

それに応える様に少女へとゆっくり歩み寄る。

「……ああ、勿論

次だけじゃない…

その次も、そのまた次も、何度も、何度でも…」

静かに、しかし、力強く、歩みと共に言葉を紡ぐ。

「俺が俺で在り続ける限りずっと…
皆を、君を――」

そして、少女の目の前へと辿り着く。

「——愛し続ける」

唯一つの“永遠”を誓う。

「…私が私でなくても？
貴男の知ってる私ではない私だとしても？
私の中に“貴男”が居ない私だとしても？
それでも、貴男は——」

今にも泣き出しそうな瞳に自分の姿だけを映す。

「愛し続けるよ
在るがままの、君を」

優しく、けれど、強く…
抱き締め、唇を重ねる。

閉じ逝く世界。

感じる熱は焰ではない。

何よりも、誰よりも愛しい少女の温もり。

ただ、それだけを感じて…

ただ、それだけに溺れて…

ただ、それだけに染まり、

終端を迎える。

愛してるよ、
■ ■

愛してるわ、
■ ■

ずっと、ずっと…

いつまでも…

——何の感覚も無い。

なのに、自分が在るのだと理解出来る。

“何処か”は判らない。

真っ暗な世界。

そういう世界なのか…

或いは、単に自分の視覚が失われた為か…

判断する事は難しい。

自分が自分だと認識出来ているのにも関わらず…

五感は機能していない。

いや、この場合——

肉体その物が存在しているのかすら定かではない。

ただ、自分は居るが…

“彼女”が居ない。

“彼女”の存在を何処にも感じられない。

“胡蝶”――

“彼女”の言葉が無情にも正解の様な気がした。

自分は“夢”から覚める。

“夢”から覚めたら…

また、“日常”が始まる。

朝起きて、服を着替えて、朝食を食べて…

家族に“行ってきます”と告げて家を出る。

自転車のペダルを漕いで、見馴れた道を走る。

学校に着けば友人達と共に挨拶を交わす。

眠い目を擦り授業を受け、他愛のない話を交わして、くだらない事に笑う。

そんな、有り触れた日常。

そんな、繰り返しの毎日。

でも、其処に

“彼女”は居ない

自信に溢れた強い眼差しも

照れ臭そうに俯いた横顔も

愉しそうな悪戯な微笑みも

寂しがりで、意地っ張り、
人一倍の頑張り屋さんで、
無闇矢鱈に負けず嫌いで、
完璧主義な故に甘え下手、
自己主張は大得意な癖に、
初を越えて恋愛に不器用…

誰よりも厳しく在りながら
誰よりも優しい――

――“彼女”が居ない。

…そんな世界に生きる？

――無理だ。

…そんな世界が楽しい？

——巫山戯るな。

…なら、どうしたい？

——決まってる。

“彼女”が居ないのなら、存在する意味が無い。
生きる理由が無い。
命の価値が無い。

そんな世界に戻る位なら、死んだ方がマシだ。

…じゃあ、覚悟は良い？

——ああ、殺ってくれ。

そう答えた瞬間——

“何か”が自分を染めた。

…これで君は死んだ。

君が存在した“正史”から君は消え去る。

でも、それだと歪みが生じ“世界”が崩れる。

だから、ね――

君を、君が居た“外史”へ移し換える。

君は再び生を歩む。

“正史”は“外史”へ…
“外史”は“正史”へ…

さあ…眠ろう。

“胡蝶”は“夢”に――
“夢”は“現”へと――

“道”は繋がる。

彼方の面影

「……………ん……………」

何かに引かれる様に意識が深淵から浮かび上がる。

無意識の内に両手の指先を動かし、己が意識と身体を同調させる。

瞼越しに感じる光。

当たり前の様に重く閉じた瞼をゆっくりと開く。

射し込む光に眩しさを覚え目を細めながら右手を掲げ視界に影を作る。

影が光を薄め、徐々に目が慣れてくる。

ゆっくりと右手を退かす。

視界に映ったのは蒼い空。

白い雲がゆったりと流れ、その中で小鳥が飛び回る。

混濁した意識の為か…

思考がはつきりしない。

自分を自分と認識出来ず、曖昧な存在に感じる。

刹那——風が吹いた。

何の変哲も無い——
有り触れた微風。

しかし、風が運ぶ草の香に意識は染められる。

それは自分が生まれてからずっと共に在った——
自分が育った大地の香。

自分が“自分”で在る事を思い出させてくれる。

もう一度、瞼を閉じて風に身を委ねる。

心地好い微風が頬を撫で、前髪に優しく触れ……

耳元では風に揺られる草が子守唄を唄い……

柔らかな陽射しが身を包み微睡みへと誘う。

「……クウン……」

頬に冷たい感触。

瞼を開ければ“青い瞳”がジッ…と見詰めていた。

「……」

違う筈なのに――

その青い瞳に――

――“少女”が重なる

現実“夢”が重なる。

紅く染まる蒼天――

逆巻く焰の慟哭――

終端の中でさえも――

ずっと感じていた温もり。

「――っ！？、うゝあゝっ…」

心臓を鷲掴みにされた様な痛みが襲う。

反射的に左手で胸元を掴み強く握り締める。

それは、殺那的な痛み。

治まると肺に溜まっていた空気をゆったりと吐き出し左手を弛緩させる。

「…キュウン…」

心配そうに覗き込んできた頭に右手を伸ばす。

ワシワシと撫でてやる。

目を閉じ、気持ち良さ気に頭を擦り寄せる。

頭の向こうで尻尾が大きく揺れているのを見て自然と笑みが浮かぶ。

「…ありがと、穂輅」

穂輅ほろと呼ばれたのは真っ白な毛の犬。

——いや、犬ではなく狼。

穂輅を退かせながら左手を付いて上半身を起こす。

眼下に広がるのは蒼天と、幾重に重なる緑の大地。

そして、今自分が居るのはそれを一望出来る丘。

“此処”は――

自分が生まれ育った世界。
自分が存在している世界。

決して、夢ではない。

紛う事無き、故郷の景色に安堵の息を吐いた。

「…また、あの夢…」

昔から――物心付く前から繰り返し見続けている夢。

だが、夢と言うには余りに現実感が有り過ぎた。

夢なのだから少し位違っていても良さそうなのに…
必ず同じ内容。

まるで“絶対に忘れるな”と言われている様だ。

そして、必ず胸が痛む。

病気かとも思ってたが…

“夢を見た後だけ”しか、痛みが襲う事はない。

つまり、病気ではなく——“心”が痛んでいる。

それを理解するまで時間はそんなに掛からなかった。

「……………愛してる、か…」

恋なんてした事さえない。

そんな自分が愛を囁くなど想像するのも難しい。

それなのに夢の中の自分は“少女”を愛している。

夢から覚めると薄れてゆく心の中の暖かさ。

それはまるで陽光。

厳しさと優しさを併せ持ち全てを照らす日輪。

“少女”は正にそう。

しかし、同時に対極の姿が頭を過る。

“夢の後”の白昼夢。

淡い琥珀色の月下。

“少女”は声を上げながら泣きじゃくる。

黒天に瞬く星よりも美しく儚く輝くのは涙。

ボロボロと留処なく溢れ、“少女”は心を晒け出す。

余りにも脆弱で…

手を伸ばしても届かず…

声を出しても伝わらず…

ただただ、見詰める事しか出来なくて。

歯痒さに、もどかしさに、己が無力に憤る。

——何故、泣いてる？

——何故、守れない？

何故——

傍に居て、腕に抱き締めてやれないのだろう。

その想いと共に夢は覚め、自分は再び現実へと戻る。

“夢の中”の“少女達”は何処かが違う。

同じ筈なのに、異なる。

何故かは判らない。

でも、そう感じる。

何度も、何年も、考えた。

それでも答えは出ない。

答えを出す方法の一つ。

“少女”を探し、逢う事。

それしかない。

ゆっくりと空を見上げる。

空の蒼さは変わらない。

だが、雲が流れた為に顔を見せた真昼の月。

もう少しで満月になる位のその姿を見詰める。

琥珀でも、蒼白でもない、蒼に溶けそうな淡い白。

それでも、蒼には染まらず存在する確かな白。

有りの俤を抱く想白。

在るが俤に在る孤白。

先程迄は判らなかつた月。

雲という目隠しが無くなりその姿が露になった。

其は雄弁に語る。

“ 眞実は見様としなければ決して見る事は叶わない ”

この月の様に。

“ 夢 ” は靄が掛かつた様に目覚めると曖昧になる。

直後の混濁した意識の中は朧気ながら理解している。

なのに、意識がはつきりすると同時に霧散する。

まるで誰かに “ 忘れる ” と言われている様に。

思い出そうにも思い出せず心はもやもやするだけ。

夢の内容を思い出せない事なんて珍しくはないが…
何度も同じ夢を見ている筈なのに思い出せない。

やはり夢は夢なのか。

それとも――

思い出したくない程に辛い内容だから “ 忘れて ” …

消す事の出来ない程強烈な内容だから“忘れず”…

故に繰り返すのか。

答えの出ない思考の迷路。

それでも――

覚えている事が有る。

“少女”の“青い瞳”を。

蒼天の如く曇り無く澄み…

青海の如く限り無く深く…

瑠璃の如く美しくも儚い…

その瞳に宿る眩い輝きを。

自分は知りたい。

あの夢が秘めた真実を。

自分は見てみたい。

夢の中の“少女”を。

自分は見付けたい。

ずっと探し求める答えを。

だから――

「――旅に出る」

保留し続けた選択。

ずっと生まれ育った故郷を離れる事を躊躇っていた。

離れたら最後――

もう二度と戻れない。

もう二度と“家族”に会う事は叶わない。

帰る場所を失う事が怖い。

踏み出せなかった。

けれど、それも終わり。

安寧の中で、真実から目を逸らして生きるよりも…

辛く、苦しい事だとしても真実を追い求める。

漸く、その決心が着いた。

自分を見失わぬ為に。

自分が自分で在る為に。

「…ありがとう…」

真昼の月に向かい微笑み、背中を押してくれた事への感謝を囁く。

気のせいかもしれないが、月の中で“少女”が微笑み返してくれた気がした。

“待つてるわ”――

そう囁きながら。

自分勝手な幻想…

思い込みかもしれない。

それでも、嬉しくなる。

優しく、暖かな、温もりが心に広がる。

不安や寂しさが拭われる。

ただただ、心が逸る。

“君に逢いたい”――

その一心に。

頭を逸らし、瞼を閉じると大きく息を吸い込む。

昂る心を落ち着かせる様にゆっくりと息を吐く。

「…よし、帰るか、穂輅」

そう言って瞼を開けて立ち上がる。

隣に座っていた穂輅も立ち同時に駆け出す。

一つの終わりへと向かい…

そして、一つの始まりへ。

彼方の面影（後書き）

すみません、三作目です。 m (——) m

作品説明通りに私の気分を紛らわす為の物語。
なので、超御都合主義。

まあ、タイトルと二話分で判ると思いますが…

ヒロインはあの方っ！

だって、好きなんだもん。

また他の二作品とは違って後書きは残します。

私の愚痴やらネタバレやら二作品との比較やら…
色々あるかと。

御時間の有る方は暇潰しに読んで見てやって下さい。

因みに——

これが進んでいる時ほど、絶賛スランプ祭りです。

では、（＾・＾）ノ

言祝ぐ夜明け

ついで
渡戸非土

高い山々に囲まれた島。

連なる岩礁と大渦に包まれ何人も生きて渡る事叶わぬ絶海の孤島。

故に大陸からは隔絶され、“外”を知る者は無し。

奇跡的な強悪運の持ち主が流れ着いたという伝承さえ二百年以上前の話。

つまり、“外”から訪れた者は一人も居ない。

そう――“外”からは。

「……今、何と言った？」

目の前に座った老人の目が鋭く見据えてくる。

「“外”に行く」

もう一度、意志を告げる。

老人——自分の一族の長は暫し無言で見詰め……
大きな溜め息を吐く。

「意味は判つておるな？」

「勿論、覚悟の上で」

長の問いに迷わず答える。

島に入る事は不可能でも、島から出る方法は有る。

島の中央に聳える天龍山。

その麓に広がる樹海の奥に洞窟が口を開けている。

その最深部には巨大な石の扉が在り、先に“外”への道が続いているらしい。

扉の開け方は各一族の長に秘して伝えられる。

つまり、長の許可無くして“外”に出る事は不可能。

そして、“外”に出る事は二度と戻れぬ事を意味し、一族との別離となる。

「……何故に“外”へ？」

「自分が自分で在る為に」

洪面の長。

一族の者は血縁に関係無く“家族”として暮らす。

故に“家長”たる長の者にとって許可する事は身内を追放するのと同じ。

悩まない訳がない。
辛くない訳がない。

その心を理解していても自分の決意は変わらない。

「……………判った」

「ありがとう、爺ちゃん」

“何を言っても無駄か”と諦めた様に長は承諾した。

「扉の事は知つとるな？」

その言葉に首肯する。

「扉を開けるには“鍵”が必要になる
じゃが、“鍵”と言っても物ではなくてな…」

そう言つて長は顔を横へと向ける。

それを追つて見れば窓から天龍山が見える。

「天龍山の頂に祠が有り、その中に水を湛えた石鉢が置かれておる
その水——“龍水”を飲む事で己が身が“鍵”と化し扉の前に立て
ば開く…」

じゃがな、“龍水”は人の身には猛毒も同じ…
“資格”無き者は其の身を内より焼かれ滅び…
“資格”が有つたとしても無事とは限らぬ
二十年程前に“外”へ出た者は右腕を無くした
……それでも、行くか？」

静かに立ち上がり長の目を真つ直ぐに見据える。

「我が心に迷い無し」

笑顔で告げて立ち去った。

天龍山

穂輅を伴って山を登る。

善は急げと勇んで来たが、少しばかり甘く見ていた。

天龍山は三合目辺りまではなだらかな土の地面。
特に障害物も無い。

此処迄は特に問題も無く、麓の樹海にしても一本だけ伸びた道を通
って来たので楽だった。

三合目を過ぎると剥き出しになった岩肌が目立つ。

大きな岩が彼方此方有るが山や森で遊んで育った為に対して苦にも
ならない。

正直、楽勝だと思った。

六合目を過ぎる迄は。

六合目を過ぎた途端に道が一変した。

傾斜が極端に険しくなる。

加えて足場の悪さだ。

下が頑丈な岩肌だったのに対して、今居る所は脆い。

ちよつとでも力加減や重心の位置を間違えば崩れる。

実際、二度落下しかけた。

七合目に到達する頃には、空は夕焼けに染まる。

運良く見付けた出っ張りに穂輅と座って休む。

山頂を見た後、登って来た道を見詰める。

「…今更戻るのは無いな」

祠に着くのは真夜中か。

せめてもの救いは今が夏で今夜は曇る心配はなさそうだという事。
月明かりの有無は大きい。

穂輅の頭を撫でながら村の有る方を見詰める。

此処から見るだけでも遠く思えるのだ。

海の向こうに行けば故郷を見る事さえ叶わない。
そんな状況に自分の精神は堪えられるのだろうか。

何気無く見上げた空。

昼間見た月は薄い青白から淡い琥珀に変わっている。

その輝きを見詰めていると不思議と大丈夫に思う。

自分が自分で在る限り……

此処で過ごした刻は決して失われる事は無い。

自分がそれを無意味な物にしない限り、自分を支える一部なのだから。

それに――

「見える月は変わらない」

何処に居て見ても月は月。

それは自分も同じで――
自分で在る為に行く。

郷愁に浸るには早過ぎる。

「……よし、頑張るかっ!」

バチンッ! と両手で頬を叩き気合いを入れ直す。

その様子を見て穂輅は直ぐ立ち上がる。

一気に駆け登る位の勢いで再び山頂へ向け進む。

これから先に待つで有ろう苦難や困難の事を考えればこんな場所で躓いていたら話にならない。

「いざ往かんっ！」

岩肌に右手を掛け、山頂を目指し突き進む。

——筈が気合いが空回りし足場を崩し落下しかけた。

穂輅が襟足を銜えてくれて本当に助かった。
実に頼りになる相棒だ。

黒天には月が皓々と照り、星々が無数に輝く。

それを見上げる。

仰向けに倒れたまま乱れた呼吸を整え、疲労を感じる身体を投げ出して休める。

傍らでは穂輅が心配そうに顔を覗き込んでいる。

「…だ、大…じょ…夫…」

最後の最後は予想外。

まさか、殆んど凹凸の無い垂直の一枚岩とは…
愚痴の一つも言いたい所。

穂輅と一緒に“外”に出るには“龍水”が必要。

出る前に長に確認した所、“龍水”の効果は祠を離れ飲んでも無意味らしい。

つまり、一緒に行く為には穂輅を背負って登る他には道がなかった。

穂輅の体重が大人一人分位だったのが救いだ。
ギリギリ、登り切れた。

「…クウ…ン…」

申し訳無さそうに鼻を擦り寄せてくる穂輅。

その頭を抱いて頬を寄せて“気にするな”と言う様に身体で示す。

暫く休み、脈拍も落ち着き身体を起こして祠を見る。

パツと見は仔犬の小屋位の大きさの簡素な木造。

何故、吹き晒しの状況下で傷んだりしてないか？

そんな事を考える程度には余裕が戻っていた。

閉じられていた扉に両手を掛けてゆっくりと開く。

中には石鉢と言うよりも、石臼と言った方が正しいと思える石の器が水を湛えて存在していた。

この水が長の言う“龍水”なのだろうか…

どうやって溜まったのかを気にしたら負けだろうか？

というか、湧き水でもない感じだし、永い間溜まっているのに大丈夫なのか？

何で澄んでるんだろう？

だが、誰も疑問には答えてくれない。

「……ふう……」

小さく息を吐き、思考から雑念を排除する。

外套の内側の隠しに入れた小さな盃を二つ取り出して“龍水”を汲む。

左手に持った盃を穂輅へと差し出し、右手の盃を口元に運び準備完了。

「…いつ、せー…のっ！」

同時に“龍水”を呷る。

特に味はしない。

「……」

暫し、穂輅と見詰め合うが特に身体に目立った変化は現れな——い？

「——え？」

不意に視界が揺れ、身体力が抜ける。

膝から崩れ落ちる。

視界の中で穂輅の差し出す背中へと凭れ掛かる。

(…こ…れ…危な…い…)

苦痛の類いと違って意識を奪われるのは危険だ。

だが、頭では判っていても既に抵抗すら出来無い。

遠退く意識を感じながら、目の前は真っ暗になった。

「――っ!？」

ガバッ!、と身を起こす。

穂輅が心配そうに見詰め、周囲を見回せばまだ薄暗く夜明け前だと判る。

場所は祠の前から移動した様子は無い。

取り敢えず手足を動かし、身体の異常が有るか探るがこれと言った変化は無い。

穂輅の様子を見るが此方も何の変化も無い。

「……あー、あー

空は青いな、空気が美味しい空々しく諳じては上の空」

適当に喋ってみるが声にも耳にも問題は無い。

「……爺ちゃんの脅し？」

良く有る子供に言い聞かす為の作り話だろうか。

いや、無意味な気がする。

そうなるか…

単に自分達が運が良かっただけなのでは？

「穂輅は何とも無い？」

そう訊ねると頷いて見せたので安心する。

「なら、無事完了か」

やれやれとその場に座る。

すると、穂輅が右腕の袖を銜えて引っ張る。

何事かと目を見ると祠へと視線を向ける穂輅。

「…ああ、閉めないかね」

開けっ放しだった扉に手を掛けた時だった。

「——はい？」

“龍水”に映った顔を見て思わず目を見開く。

水面に顔を近付け覗き込み確認するが…

目の錯覚では無いらしい。

念の為、穂輅の顔を見ると“間違ってる”と言わんばかりに頷く。

改めて水面を覗く。

黒髪、黒目だった筈なのに水鏡に映っているのは…

白に近い淡い金の髪をした左右の瞳が違う自分の顔。

左が蒼で、右が紅。

蒼い瞳は、夢の“少女”と同じ色をしていた。

取り敢えず、眼が見えない訳ではない。
そう考えてみると…

「……まあ、問題無いか」

これと言った支障も無いし“外”には以前の姿を知る者は居ないのだから何一つ困る事は無い。

片腕が無くなる事を思えば髪や瞳の色が変わる程度で済んだのなら幸運だ。

そう思うと笑みが浮かぶ。

祠の扉を閉めて立ち上がり彼方を見詰める。

東の空が白み始めた。

夜が明ける。

黒天は陽光を浴びて濃紺に変わり、瑠璃色へ。

地平の彼方から暁が現れ、空の蒼と陽の紅が溶け合い全てを紫に染め上げる。

その光景を天の一番近くで穂輅と並んで見詰める。

「…穂輅、帰ろうか」

“ 帰る ” ——

その言葉を此処で使うのは今日が最後になるだろう。

それでも、心は晴れやか。

“ 帰る ” 事は無いとしても “ 故郷 ” で在る事は不変。

この夜明けは ——

新たな始まりを言祝ぐ。

難の巢立ち

天龍山を下り、村に戻り、長に会う。

「……」

ただ、ジッ…と此方を見て眉を顰める長。

ただでさえ目立つ皺が更に増えている。

「…何とも、ないのか？」

「全く、何とも」

「…むっ…」

髪を、瞳を見て右手で顎を撫でながら唸る。

「…というか…」

穂輅は何一つ変化してないのは如何なもので？」

一番の疑問を口にする。

これで一緒に行けないとかだったら、かなり凹む。

「…ん？、ああ、穂輅か
穂輅は飲んでも変わらん
というか飲まんでも良い」

鈍器で頭を殴られた様な、嫌な衝撃に襲われる。

「……………」

あまりにも無慈悲な言葉に両手を付いて頂垂れる。

（…長、もっと早く言って欲しかったです…）

あの一枚岩の厳しかった事厳しかった事…

いや、穂輅が重かったとかではなくて…
もっとこう、指先の。

（…いや、まあ…
“外”に出てからああいう事になる可能性も有るから練習と思えば
いいか…）

今更愚痴っても仕方無いし前向きに考えよう。

そう思つて顔を上げる。

「…まあ、何も無いのならそれに越した事はないか」

何処か納得が行かない様な口調で長は立ち上がる。

（平穩無事が一番では？）

思わず溜め息吐き俯く。

何かなければいけないのか本気で悩む。

それとも巢立つ雛鳥に対し試練でも与えたいのか。

まさか、何の代償も無しに出て行く事が不満とか。

流石に片腕で“外”に出るなんてしたくない。

というか、御免だ。

「準備は整つた訳だが…

もう一度だけ聞くぞ？

本当に“外”へと行く事に後悔はないのだな？」

いつの間にか正面に戻り、座っていた長が問う。

その表情は今迄で見た中で最も真剣な物だった。

これが最後で最初の選択。

「後悔するかどうかは今判りません

今はただ、自分自身の心の赴く俣に進むだけです」

長の目を真っ直ぐに見返し迷いも揺らぎも無く告ぐ。

後悔なんて今は出来無い。

それに、どんな結果で有れ自分の意思で行動した故の結果なら後悔も糧になる。

だから、今は進むだけ。

「……………そうか

お前の意志は固い様じゃ

ならば何も言う事は無い」

そう言うと、長は旅の話をしてから、初めての笑みを浮かべた。

そして、傍らから目の前に白い布にくるまれた細長い物を取り出して置いた。

一見すると杖か何かか。

長過ぎず、短過ぎず…

何と言うか、登山向き。

自然と、そんな風に考えてしまつのは登山から帰った直後だからだろつ。

「これはな、お前の母親の形見の品じゃ」

「……………え？」

長の言葉に我が耳を疑つ。

「お前の母の形見じゃよ」

そう言い長は右手で包みを押して自分の目の前へ。

ジツ…と“それ”を見詰め長の言葉を反芻する。

“お前の母親の形見の品”

“お前の――”

「……………母？」

首を傾げながら長に訊く。

“母親”と言われても何の事だか判らない。

「無理もないがのう……」

お前の母親はお前を産んで直ぐに亡くなっただけ……」

そう言ったのを皮切りに、長から経緯が語られる。

――のだが、正直聞こえていない様な状態だった。

（……………母の……………形見……………）

引き付けられる様に右手が包みへと伸びる。

くるんでいる布を広げると現れたのは白い鞆の剣。

純白ではなく陽光を思わす淡い金輝を帯びた白。

丁度、今の自分の髪の色に近い感じた。

剣は身の中程を頂点にして緩やかな弧を描く様に逸る見慣れない形をしている。

柄は紅緋の帯紐が巻かれ、菱形の隙間から下地となる鞘と同じ白が覗く。

誘われる様に左手を伸ばし鞘を掴む。

それは好奇心ではなく……
不思議な——懐かしさ。

手に取っただけで全身へと衝撃が走った。

初めて触れた筈なのに……
まるで己が一部であるかの様に感じる。
いや、馴染むと言った方が正しいだろう。

右手で柄を握り、力を込めゆっくりと引き抜く。

「……………抜けない」

何の冗談だろうか。

紐で縛られている訳でも、金具で止められているでもないのに、抜けない。

まさか、錆び付いてるとかじゃないですよ？

「……不良品？」

思わず顔を顰め呟く。

「今のお前には使う資格が無いという事じゃよ」

長は当然とばかりに言う。

“道具”を使うのに特別な資格など要するのだろうか。

しかし、何故か長の言葉が“正しい”と理解している自分に気付く。

根拠の無い確信。

理性は疑問を浮かべるが、本能は納得してしまう。

矛盾する事に思考は混乱を強いられる。

だから、即座に放棄する。

今、考えても答えが出ないのなら考える必要は無い。

孰れ、その答えが判る時が来れば判るのだから。

長から形見の剣を受け取り用意していた荷物を持って村の入り口へと向かう。

まあ、荷物と言っても…

着替えと下着が一着ずつに外套を入れた革袋だけ。中身は実に簡単な物。

寧ろ重要なのは革袋の方。

口をきっちり締めておけば中が濡れる事はない。

河に落ちても大丈夫！

(…落ちたくないけどね)

脳内で自己完結しながら、幼少期の苦い記憶が意識の底から浮かび上がる。

何の変哲もなかった日。

穂輅と歳の近い兄姉妹弟と川で水遊びをしていた。

いつもの遊び慣れた場所。
いつも通りの楽しい時間。

それが一転した。

本の少しの油断。
本の少しの慢心。
本の少しの——自惚れ。

足の届かない深い場所へと踏み入れた事。

勇敢だ、挑戦だ、冒険だと思いがった結果——
流れに吞まれ、溺れた。

正に“自らに溺れた”故と今なら言える。

（若かったなあ……
うん、若気の至りだね）

遠き日に思いを馳せながらそれ以上思いださない様に意識を逸らし
ていく。

「——お、来た来た」

くだらない事を考えている間に村の入り口に着いた。

九つの族旗が風に棚引く。

村人が——否、島の各地に住まう九つの一族の者達が集まっていた。

「……………何事？」

思わず首を傾げた。

「いやいや…」

御主の旅立ちだろうか？」

そう言ったのは九族が一つ“兜”^{とう}の長。

濃い灰色の髪と瞳が特徴の一族の男性。

まだ代替わりして間もないので容姿も年齢も若い。
口調は爺臭いが。

「そうですけど…
どうして九族集合に？」

よく見れば幼子や赤子まで来て居る。

“見送り”にしては大袈裟過ぎだと思っし…
普通、何か急を要する事が起きたと考えるだろう。

「何を言ってるのよ…
貴方、自分の立場を何だと思ってる訳？」

そう呆れた様に呟いたのは我が一族――
黒い瞳と黒髪を特徴とする“刃”^{じん}一族の次期長たる女性。
自分達にとっては姉の様な人である。

「立場って…

ただの子ども――あ痛っ!？」

言い切る前に頭を叩かれ、思わず涙目で後退る。

本気で殴ったよねっ!？」

「この馬鹿っ!

貴方は私達の家族っ!

私達は貴方の家族っ!

そうでしょっ!？」

何か違うっ!？」

「い、いえ…違います」

その迫力に気圧されながら反射的に正座しそうになる自分を必死に抑えた。

姉に続き周囲からも野次が次々と飛ばされる。

「家族との別離なんだ
集まるに決まってるだろ」

「そうそう！
戴く名は違っていて私達九族は一心同体！
私達は皆、家族だよ！」

「だいたいねえ、アンタは自分が私達にとって何れ程大切なのか判
ってないね」

「もつと自覚しろ、バカ」

「うう…妾の姫様があ…
穂輅、くれぐれも頼むよ」

「ウォン！」

「お土産は一人一つだぞ」

「外の悪い男に引つ掛かるんじゃないよ？
アンタはお人好しなんだ
気を付けるんだよ」

「私も一緒に行くーっ！」

「コラッ！
馬鹿な我が儘を言うんじゃないやありませんっ！」

説教されたり…
心配されたり…
号泣されたり…

皆、口々に、各々の想いを真っ直ぐに伝えてくれる。

自分は本当に幸せ者だと、熟と感じる。

騒がしい筈の喧騒。

それは、とても温かく…

けれど、手の届かなくなる大切な温もり。

そう思うと――

不覚にも泣きそうになる。

そんな中――

興奮気味の姉の肩を叩き、長が入れ代わって前へ。

それだけで、騒ついていた周囲が鎮まった。

「掟に従い、外に出し者は“一族の名”を名乗る事は決して赦されぬ」

その言葉は“別離”の儀と言っても間違いいではない。

九族全てに共通する掟。
如何なる例外も無い。

「——じゃがな…」

お前が我等の家族である事に変わりはない

“刃”の名を心に刻め
如何なる苦難に際しても、耐え忍び、屈する事無く、歩み——生き
続けよ」

“刃”——家族の証名。

その名に宿るは“誓い”。

溢れかけた涙を右腕で拭い長を——家族を見詰める。

「——刃”の名に連なる志を秘めし御魂よ
確と魂魄に刻み籠め…」

我が、誰が為に在るのか
誰が、我が為に在るのか

往く道無くして逝くなかれ
賭す志無くして外すなかれ

ただ、己が道を歩み続けよ

ただただ――我、一刃也」

紡ぐは一族の誓言。
家族と心を繋ぐ絆言。

「それじゃあ――
皆、往つてきますっ！」

笑顔で旅立ちを告げた。

“誓い”を胸に旅立つ。

未だ見ぬ天地へと。

見果てぬ未来を求めて。

扉の彼方

天龍山麓の樹海

山もそうだったが…

端から見ただけの印象と、実際に目の当たりにしては全く違う物だ。

「……あのさあ、穂輅
種の上では肉食と草食…
勝てないかな？」

期待を込めて訊ねて見るが穂輅は首を横に振る。

「……だよねえ…」

溜め息を吐きながら改めて目の前の存在を見詰める。

艶の有る赤茶色の短い毛に靱やかな四足…
だが——最大の特徴は頭の大きな角だろう。

歳を重ねた角は、木の枝を思わせる程に立派だ。

「…鹿、だよね？」

見た目は間違い無く鹿。

問題なのは体躯の大きさ。

(…熊並みの鹿って鹿？)

勿論、鹿には違いない。

それよりも右前足で地面を搔いていらつしやいます。

頭を下げ、角を此方へ構え鼻息も荒く――
ええもう、殺る気満々。

既に戦闘は回避不能と悟り腰を落とし半身に構える。

僅かな緊張と静寂。

カサッ…と草が立てた音を合図に鹿が突進。

鹿の姿を、動きを見詰め、間合いを計る。

機は一瞬。

それを逃さず掴む。

「——穂輅っ！」

叫ぶと同時に、穂輅と左右真横へ飛び退く。

真っ直ぐに駆けてきた鹿の両脇を態と視界に入る様に動く事で一瞬の“空白”を作り出す。

左右同時に視認した場合、“選択”を強いられ——
その僅かな“思考時間”は行動を不可能にする。

そして、先程迄立っていた場所の先には——巨木。

鈍い音を響かせ鹿は頭から巨木に激突した。

見事に角の間に幹が当たり気絶したのか……
鹿は足から崩れ落ちた。

その様子を離れた場所から穂輅と共に見詰める。

鹿には動く気配が無い。

これなら背を向けても安全だと判断出来る。

「今の内に……」

穂輅と共に身を潜めながら先へと進む。

——進もうとした。

低い——獰猛な唸り。

それを耳にしなければ。

ゆっくりと、慎重に背後へ振り返って見れば……
先程の鹿の近くに虎が居るのを見付ける。

虎は鹿より小さく穂輅より一回り程大きい位。

あの鹿なら返り討ちにする事なんて難しくない。

“普段”ならば。

鹿は意識は戻った様子で、角で虎を威嚇する。

だが、四肢は震えている。
恐らく力が入っていない。

先程の激突の影響だろう。

そして、虎も鹿の様子から好機だと察している。

“弱肉強食”——

その理の下に、命は巡り、生と死は廻る。

鹿の頭が僅かに傾く。
朦朧としたのだろう。

その一瞬を逃さ筈もなく、虎は飛び掛かった。

鹿は応戦しようとするが、虎の爪と牙の方が早い。

勝者は――

生き残るのは虎。

――その筈だった。

駆け込む自分の跳び蹴りと穂輅の体当たりを真横から受けなければ、
空中に有った虎に回避する術は無く、見事に吹っ飛び木に衝突した。

「ただ傲慢で、自分勝手な自己満足だけどね……」

弱肉強食は否定しない。

“漁夫の利”も悪くない。

虎に非はない。

生きる為の行為だ。

でも、自分に端を発しての結果なら覆す権利も有る。

鹿を助けた結果…

この虎が飢え死にするかもしれない。

自分達を殺そうとした鹿を助けたのに…

ただ生き様とした虎を犠牲にする様な行動。

それは酷く矛盾した話。

“偽善”や“独善”という言葉が頭に浮かぶ。

だから、せめて埋め合わせ位はしておく。

「此奴に比べたら少ないと思うけど…

“今”は空腹を満たせる」

そう言つて、穂輅の背中に括り付けてあつた荷物から干し肉の塊を取り外すと、虎に歩み寄り前に置く。

彼等は“食い溜め”だとか“保存”なんて事は滅多に考えない。

常に“現時点”での空腹を満たす為に狩りをする。

獲物である鹿を助けた分を別の代用品を差し出す。

“取り引き”として見れば悪くない内容だろう。

勿論、虎が理解出来るかは全く別の話だが…

空腹を満たす事が主目的で狩り自体は手段なのだから結果としては変わらない。

怯み此方を警戒する虎から離れると穂輅と共に樹海の奥へと足を進める。

暫くして背後の足音に振り向くと先程の鹿が居た。

敵意は無い様子。

此方が立ち止まると近付き擦り寄って来る。

「ん…擦りたいって」

鹿の額——角の間を指先でコリコリと搔いてやる。

目を閉じ、気持ち良さ気に身を委ねて来る。

ちよっぴり穂輅が嫉妬して拗ねているのは御愛嬌。

その後、鹿は付いて来た。

“洞窟迄だし…いいか”と特に気にもしなかったが…

鹿は此処等辺の主なのか、単に縄張りだったのか…

遭遇する虎や熊、猪など…

危険性の有る森の住人達が悉く道を譲っていく。

お陰で洞窟の入り口まで、すんなりと無事に到着する事が出来た。

世の中、何が起こるかなど誰にも判らない。

唯一つだけ言えるのは――

“情けは人の為ならず”。

洞窟の入り口で鹿と別れ、穂輅と共に暗い口の中へと足を踏み入れた。

中に陽光は届かない。

とは言え、松明が居る程に不自由な訳ではない。

周囲が深い樹海な為に目は暗さに慣れていた。

流石に入った直後は視界が利き難かったが…

今は自分の周囲の岩肌でもはつきりと見える。

天龍山の三合目過ぎ辺りの質感に似ている。

取り敢えず、右手で岩肌に触れ撫でてみた。
ザラついた感触はない。

寧ろ、ツルツルと滑らかな宝玉の様な肌触り。

軽く握った拳で叩く。

簡単に崩れる様子は無く、かと言って自分に崩す事が出来そうにも無い。

そんな岩肌が左右と頭上を一枚岩の様に覆っている。

だが、足元は違う。

岩と言うより荒野の地面と言った方が良い。

土に砂と石が混ざり合った周囲とは異質な存在。

岩肌を掘った洞窟にしては不釣り合いで不自然。

違和感を隠せない。

もし仮に“気にするな”と言われれば、それまで。

“そういう造りなんだ”と頭を切り替えるだろう。

勿論、考えても仕方が無いなら考えない。

気にし過ぎず、油断せずに警戒を怠らなければ良い。
それだけの話だ。

「…にしても不気味な…」

島民の間では“鬼が出る”とか云われている。

当然ながら普段は立ち入り禁止とされている。

だから、子供達も好奇心で立ち入りはしない——が、話を信じてもない。

しかし、実際に目の当たりにすると判る。

この雰囲気ならば納得。

“何か”が居ても不思議に思わないだろう。

“恐怖”を煽る様な細長い洞窟の道は宛ら“蛇の腹”とでも言おうか。

先の見通せない深い暗闇が無駄に不安を掻き立てる。

不意に脳裏を過ったのは、兄弟姉妹と遊んだ“鬼事”での一場面。

姉兄——主に姉だが——の容赦の無い攻撃。

隠れ場所や逃げ道、草陰に巧妙に隠して仕掛けられた“それ”の驚異。

「…畏とか…無いよね？」

思わず呟いた一言。

——ガゴンッ！

まるで、それに答える様に足元の地面が消えた。

「え？——っええええええええええええええええー！……」

抗う事など出来る筈も無く手足をバタつかせながら、底の見えない暗闇へ落ちて行くしかなかった。

その時——

突然の事に呆然としていた穂輅は残響を聞きながら、暫し穴を見詰める……

主人の後を追って縦穴へと飛び込んだ。

「——ああああああああああああ——っ！……！……」

絶叫しながら——

ズジャッ！、と豪快に身体ごと何かに突っ込んだ。

「あ痛たたたた……」

仰向けのまま瞼を開くと、自分が今滑り落ちてきたと思われる穴が目に入る。

其処から白い塊——穂輅が飛び出して来た。
自分とは違い綺麗な着地。

途中で打付けた背中を擦りながら上半身を起こす。

落とし穴に嵌まり縦穴だと死を覚悟したが……
意外にも途中で変わった。

縦から斜めに。

その後は斜面を滑る様に、加速しながら滑降。
体勢を変えずに居たら服はボロボロになった筈。

しかも出口に砂丘が有って助かった。
もし岩肌だったら骨折では済まなかっただろう。

そんな事を考えていると、穂輅が擦り寄って来る。

可能性に対する不安が顔に出ていたのかもしれない。

「……ん、大丈夫」

穂輅の首を抱き寄せ、頭を撫でながら言う。
安心させる様に。

「——あれ？」

其処で気付く。

妙に視界が利く。

地下深くなのに明るい事を不思議に思い周囲を見回し要因を探す。

今居る場所は半球状に刳り貫かれていて、広さは凡そ直径で二丈程。

壁や天井は“上”と同じで違和感も感じない。

それなら下か——と視線を落としてみる。

一見すれば何の変哲も無いただの砂の山。

だが、違和感が有る。

正体は直ぐに判った。

明るさ——光が有るのに、“影”が無い。

左手で一掬い。

サラサラとした感触だが、自分の知っている砂よりも軽い気がした。

右手を被せて見れば——

砂が僅かに発光してる事に気付いた。

原理は判らないが…

お陰で助かる。

砂は部屋から伸びる道へと続いている。

視界には困らないだろう。

立ち上がり気を取り直して先へと進んで行く。

何れ位歩いたか…

何れ位経ったか…

距離も時間も判らない。

代わり映えしない景色に、感覚が奪われている。

道中、分かれ道は無く、罨もあの一度だけ。

そう考えて、気付く。

分かれ道が無ければ…

合流する道も無い。

つまり、此処へ来る為には“落とし穴”を通る以外に方法は無い。

それは、この道が特別だと言っているも同じ。

そして、肯定する様に道が突き当たりを迎えた。

ただし――

行き止まりではない。

下へと続く階段が伸び…

その先に“扉”が在った。

三十段程の階段を下りて、“扉”の前に立つ。

“扉”というより“壁”と言った方が正しいか。

四隅、四辺に隙間は無く、手前の横壁、天井、地面と繋がっている。

「……………行き止まり？」

隙間も、取っ手も…

“扉”として有るべき物が何一つ見当たらない。

細工や装飾も施されていない真っ平らで、真っ白な壁。

「……………はあああ……………」

大きな溜め息を吐きながら階段に腰を下ろす。

目の前には“扉”と思しき壁が在るのみ。

「…手詰まり、かあ…」

そう呟くが落胆しない様に気持ちを保ち思考する。

諦めたら其処で終わり。

故に諦めない為に考える。
道を切り開く術を。

ジーツ…と壁を見詰める。

目の前に“取っ掛かり”はらしき物は無い。

しかし、これが“扉”だという事は間違いない。

“外”へ出さない為なら、これ程に深い場所まで道を作る必要がない。

同時に“行き止まり”も。

よって、本物だと思う。

余程に捻くれた性格の者が造ったのでなければ。

「…となると鍵は……あ」

“鍵”——そう“鍵”だ。

“扉”を開くには“鍵”が必要であり、その“鍵”は自分自身。

立ち上がると“扉”の前に佇んでみる。

しかし、変化は無い。

右手を軽く握って“扉”を叩いてみれば…

コツ、コツと分厚い感触が音と成って返って来る。

“開く”様子はない。

「引いて駄目なら…」

掌を“扉”に当てて押す。

すると——ゆっくりと掌が“扉”に埋まってゆく。

押すのを止め、掌を戻せば“扉”の表面が水面の様に波紋を作った。

「成る程、確かに“鍵”は自分自身みたいだね」

そう言いながら穂輅の方へ振り向く。

その眼差しが“行こう”と強く訴える。

瞼を閉じて深呼吸。

脳裏に浮かぶのは故郷での沢山の思い出達。

そして——“少女”の瞳。

「——さあ、行こうっ！」

目を開き、“扉”へと掌を押し当て、前へと進む。

世界は求む。

始まりを紡ぐ者を。

世界は招く。

終わりを齎す者を。

世界は刻む。

悠久の時の記憶を。

これはまだ、その一端。

結末も、未来も――
誰にも判らない。

そう――世界にさえも。

扉の彼方（後書き）

序章 了

次話より漸く本編です

上手く纏められない自分の脳ミソと遅筆が憎い…

今回はいきなり原作キャラ登場ですっ！

作者の中では五指に入る程好きな方です♪

本当はこの方をメインでの物語も書きたい…

→でも、余裕無し（汗）

また、他の二作品と違って一話の量は軽めかと

4～5000字位が目安で場合によって増えます

m ——— m

尚、キャラの設定・紹介はオリキャラが中心です
原作キャラの変更点は少しくらいだと思います

では、また次回（＾・＾）ノ

一章 逢遇は波の如く

白い靄の中を歩く。

五感は働いている筈なのに感覚は何故か不確かで。

例えるなら——夢の中。

“何処まで続くのか…”とそう思った時だった。

唐突に道は終わった。

「——んぶっ？」

四肢を冷たい感覚が襲う。
次いで息苦しさ。

瞬間——理解する。

自分が“水中”に居ると。

「ぐぐぼっ、ぶぐっ！」

慌てて両手で口を塞ぐ。

同時に忌まわしい記憶から緊張が走る。

怖い――

もがこうにも恐怖心により身体が思う様に動かない。

本能は警鐘を鳴らす。

しかし、頭の中は混乱して冷静な対応が出来無い。

――このまま溺死する？

そう思った時、襟足を引く力を感じた。

水に濡れた衣服は重いのに身体は天井の様に高い陽光を反射する水面へ向かって浮上してゆく。

「――ぶはあっ！」

顔が出た瞬間に一気に息を吐き出した。

再び沈みそうになる身体は何かを支えられる。

「……ほ、穂輅……ゴホッ……
……はぁ……あ、ありがと……」

穂輅の背に横側から被さる形で掴まる。

穂輅は両足を動かしながら器用に波間を進む。

穂輅を傍に感じるからか、水中で襲われた様な恐怖は今も存在しない。

多少の苦手意識な程度。

空と海の青を眺めながら、ゆっくりと呼吸を整えるところも正常に戻る。

（いきなり海中に出るって酷くないですか？）

こんな風に仕掛けを造った“誰か”に胸中で呟く。

茶目つ気なんて言葉で済む事ではない——が、これは“外”へと出た者に対する警告——教訓の様な物なのかもしれない。

（常識は通じない、と…）

多分、そういう事なんだと解釈する。

島内で暮らしていた頃とは“常識”その物が異なり、先ず“此方の常識”を学び身に付けなくてはならない事を理解した。

尤も、身に付けるべき事は山程有るだろう。

それはそれで楽しみであり今から期待に胸が弾む。

良い事ばかりではないとは思っけど。

（……うん、自力で泳げる様に頑張ってみよ…）

穂輅に助けて貰ってばかりでは情けない。

それに何か有った時に泳ぐ必要も出るだろう。

蒼天を見上げれば眩く輝く日輪が在る。

其処に“少女”が重なる。

唯一人に会う為の旅。

その中で幾つ逢別を重ねる事になるのだろうか。

（必ず――

必ず、君に会いに行くよ）

空と海の青の狭間で誓う。

唯一つの“志”を。

視界は青一色。

空を彩る筈の白い雲さえも今日は皆無。
清明にして、正に蒼天。

穂輅の背中に掴まって波に揺られている。

「——ん？」

視界の端に“異色”を捉え右手で廂を作り目を細めて注視する。

波間に見え隠れする何か。

青の波の中、陽光を浴びて二藍色が煌めく。

一瞬ではあったが人の腕が目に入った。

「穂輅！、右っ！

右に人が居るっ！」

穂輅は首を右に巡らせると人影を見付け、進行方向を変えて向かう。

運が良いと言っべきなのか幸いにも流れは此方へ。

直ぐに両者の距離は縮まりはつきりと姿を捉えた。

木片に左肩から凭れ掛かる様に覆い被さっている。

水面に広がる二藍色の髪。

髪と破れた衣服の隙間から覗く褐色の肌。

それは見た目二十歳前後の女性だった。

「穂輅、もう少し右っ…

ちよっ、行き過ぎ戻って…

——っ…もう、少しっ…」

不安定な水の上で女性へと手を伸ばす。

だが、波が邪魔をする。

掴めると思えば掌から擦り抜けて波に流される。

そんなもどかしさを何度も繰り返す。

「穂輅、ちよっとの間だけ動かないでね」

そう頼むと穂輅はその場に浮かぶ程度に手を緩めた。

それを確認し直ぐに身体の位置を入れ替える。

穂輅の左側から右側へ。

これで女性と同じ側。

届かなかった手も届くし、支え易い筈。

その結果は――

「――っと、届いたっ！」

女性の腕を掴むと引き寄せ穂輅の背中に乗せ替える。

意識が無い人は通常よりも重くなるのだが、水の中と有って身体が勝手に浮いてくれて助かった。

女性が落ちない様に身体を抱えながら穂輅に掴まると穂輅は二人分の“荷重”を背負って海原を進む。

最初は青しか無かった視界にも陸地が映った。

しかし、水の流れが徐々に変化し進行を妨げた。

穂輅は頑張ってくれているけれど体力は有限。
加えて水が体温を奪う。

人と狼の違いは有っても、寒さは大敵。

（それに――）

頭上を見上げる。

晴天は何時の間にか曇天に変わり、太陽は水平線へと近付いて、世界を赤く染め様としていた。

もう日没が近い。

既に海岸は見えている。

しかし、泳げない自分には足をばたつかせて進むのを手助けする程度だが……

しないよりは良いだろう。

なら、後は相棒を――

穂輅を信じるだけ。

海岸――砂浜が目の前まで来ていた。

恐る恐る右の爪先を水底へ伸ばすと――確かな感触。

そのまま足を伸ばすと膝を曲げた状態でも踵が着く。

負担を少しでも減らす為に直ぐに穂輅の背から離れて岸に向かう。

砂浜に上がって振り返ると穂輅は女性を背負ったまま突っ伏していた。

「ありがとう、穂輅
今は休んでて…」

穂輅の頭を撫でながら労い微笑んだ。

その場に穂輅達を残して、周囲に視線を巡らす。

海上から見た限りでは村も邑も見当たらなかった。

右手には林、左手には山。

この砂浜も思っていた程は広くない。

多分、内陸からは判り難い入江なのだろう。
人氣が全くしない。

(そう都合良く有る訳ないとは思うけど…)

このままでは危ない。

夜になって冷え込めば更に体温と体力を失う。
その先に待つのは死。

せめて、雨風を凌げる位の洞窟でも良いから見付ける必要が有る。

消耗した穂輅にこれ以上の無理はさせられない。
今度は自分が頑張る番だ。

選択肢は二つ。

日没後の危険を承知で山へ入って行くか…
洞窟の無さそうな林に入り別の方法を探すか。

悩んだ結果――
林に入る事にした。

そして、それは吉と出る。

「……………小屋、だね？」

一人呟く目の前には所々に穴は空いているが、手入れ次第で十分に
雨風を凌げる程度の小屋が有った。

蔦や雑草に覆われていても倒れる気配は無い。

放置されて長いだろうに、“死んだ”感じはしない。

「……………まだ“生きてる”」

家は“主”を失えば直ぐに傷んでしまう。

だから、こうして在る事は不思議でしかないが…
兎に角、僥幸だった。

背高な草を掻き分け引き戸へと辿り着く。

戸口に手を掛けて動かせばガタガツと音を立てるが外れる様子は無い。

中へと踏み込んで驚いた。

外観の印象とは違い屋内は思ったよりも綺麗。

頭上を見上げてても屋根には然程傷んでいる箇所はなく壁面の補強だけで良さそうである。

「さあ、早く済ませよう」

そう呟くと再び外へ。

周辺を探索し、補強材料に使えるそうな枝や大きな葉、蔦に枯れ木を集めた。

ある程度集まると小屋へと戻って作業を始める。

ちゃんとした大工道具など無くても大丈夫。

島に居た頃から皆の手伝いをして学んでいる。

屋根の雨漏り、壁の隙間風なんて日常茶飯事。

慣れた手付きで補強作業は進んでいった。

小屋の補強が終わると外で薪を集め――
その後、穂輅を迎えに。

休んで体力の戻った穂輅に荷物は任せ、自分は女性を背負って小屋へ戻る。

林に入る頃には夕日が海の彼方に消えた。
出る前に火を起こして来て正解だった。

小屋に入って直ぐに女性を板場の床に敷いた枯れ草で作った蒲団に寝かせる。

着ていた服――赤い衫子を脱がし、下着――と思しきさらしと褌を外す。

「穂輅、大袋の方貸して」

穂輅が渡してくれたのは、出掛けに姉から持たされた大きな革袋。

中には自分と穂輅が一緒にくるまれる程の大きな布が二枚と手拭いが三枚。

傷薬に包帯も入っている。

「貴女は予言者ですか？」

そんな事を思わず呟くが、気を取り直して女性を見て状態を把握する。

外傷は右腕の青痣のみ。

差し当たり心配はなさそうだと判ると手拭いで濡れた身体を丁寧に拭く。

後ろでは穂輅が器用に薪を竈にくべている。

お陰で屋内は大分暖かい。

女性の身体を拭き終わると大きな布を布団の代わりに掛けておく。

多分、これが正しい使い方だと思うと自分の“旅”に対する認識の甘さを痛感し同時に姉に感謝する。

いや、“家族”の皆に。

持たされた時は邪魔にしか思わなかった鍋や御玉杓子だったが、正直助かる。

食糧も干し肉は失ったけど米や干し野菜は御粥を作るには最適。

幸いにも、小屋の近くには小川が流れていた。

「さて、夕餉を作ろつと」

鍋を竈に乗せ、組んできた水を注いで米を入れる。

煮立つ間に、薪集めの際に林で見付けた山菜を小刀で刻んで置く。

「んー…魚、居るかな？」

何と無く物足りない。

というか、本当なら穂輅の為に肉が欲しい所。

鍋の様子を見れば煮立つ迄時間が掛かりそう。

「穂輅、火、見ててね」

そう頼んで外へ。

小川の方へ歩いて行く。

その途中、木々の隙間から見える空を仰ぐ。

まだ、月明かりが溢れてはいるが雲は厚く、黒い。

「……降りそうだなあ……」

旅の初日から雨かと思うと小さく溜め息を吐いた。

小川に着き水の中を窺う。

思いの外、魚が居た。

住人が居ないからなのか、警戒心が無く悠々と捕獲。

ざっと数えても十五匹。

序でに蛇が三匹。

三人——一人と一匹——が食べるには十分な量。

意気揚々と小屋に引き返し手際良く調理を再開した。

其の名を

o t h e r s i d e |

闇の中、意識が浮かぶ。

パチパチッ…と何かの音が聞こえる。

「……う……ん……」

ゆっくりと重い瞼を開くと見知らぬ天井が有った。

ぼやけた視界も二、三度の瞬きで正常に戻る。

やはり、見知らぬ天井。

「……此処は？……」

自然と呟いた。

「——あつ、良かった…
気が付いたみたいですね」

「——っ！」

そう言われて初めて気配に気付いた。

反射的に身体を起こそうと右手を付いた。

「——ぐっ！？」

右腕を激痛が襲った。

同時に上半身は支えを失い倒れ込む。

だが、次ぐ衝撃は来ない。

誰かが抱き止めてくれたと温もりを感じて判った。

見上げれば——

白に近い淡い金の長い髪、紅と蒼の左右で異なる瞳の幼さの残る顔の少女。

「無理は駄目ですよ？」

「…あ、ああ…すまない」

そう答えると少女は安堵の笑みを浮かべ身体を起こすのを手伝って

くれた。

その際、何故か自分が裸な事に気付いた。

少女は濡れた服を乾かし、外傷の有無を確かめる為と説明した。

干されている褌とさらしを見て奇妙な羞恥を覚えた。

一息吐いて周囲を見回す。

室内は簡素な作りで家具もそう多くはない。

例えるなら、漁師達が使う小屋の様な感じだ。

中に居るのは先程の少女。

他の者――家族らしき人は見当たらない。

（孤児、なのだろうな…）

今の世では珍しくない。

小柄で細身、着ている服も上下灰色の地味な物。

しかし、何処か気品を感じさせる辺り、育ちは良いのかもしれない。

（小蓮様と同じ位か…）

その容姿から判断する。

多分、歳も然程変わらない位だろう。

鍋に向かう少女の傍らには真っ白な毛の大きな犬。

そう思った瞬間――

物凄い目で睨まれる。

(…………… もしや… あれは“犬”ではない… のか?)

それを肯定する様に頷かれ吃驚する。

左手で目頭を押さえて俯き“… 疲れているのか…”と胸中で呟く。

すると、鼻腔を良い匂いが攪った。

顔を上げれば少女が両手で粥の入った椀を差し出して座っている。

「温かい内にどうぞ

味の方は――お口に合うか判りませんが…」

苦笑しながら言った少女に笑顔を返す。

「有り難く頂く」

匙で掬って口にした粥は、仄かな甘味で優しく少女の人柄を感じさせ…

その温かさが冷えた身体に心地好く染みた。

食事を終える頃になると、バラバラと屋根を叩く音が響きだした。

「……………雨が…」

音は間隔を早め程無くしてザー…と勢いを強める。

全ての音を掻き消し世界に隔たりを生む。

私の“内と外”を分かť、水音の壁。

(……………いつまで経つても慣れないな…)

浮かぶ記憶の彼方の情景を頭を振って消し去る。

今はすべき事が有る。

「此処はどの辺りだ？」

そう少女に訊ねると困った様に苦笑した。

「すみません…」

島から出たばかりで此方の地理には疎くて…」

「島？」

「はい、渡戸非土です」

聞いた事の無い地名だ。

だが、思い当たる事が一つだけ有った。

「その島には…外から入る事が出来るか？」

「いえ、無理だと思います
出る事さえ困難ですから」

少女の答えで確信する。

「“夷州”の者か…」

「夷州？」

どうやら向こうと此方では呼び名が違っらしい。

「夷州とは大陸——漢王朝での島の呼び名だ
其方らでは“渡戸非土”と呼ぶ様だな」

そう言う少女は理解し、“成る程”と頷いている。

（しかし、夷州となると…

此処は揚州の南——

建安郡の南部の海岸辺りが妥当な所か…）

大雑把ではあるが現在地が判ったのは助かる。
これで、ある程度は進路を定める事が出来る。

「あ、あの…

もしも、御迷惑でなければ近くの村まで一緒に連れて行って頂けませんか？」

少女は遠慮がちに訊ねる。

少し考えれば判る事だ。

右も左も判らぬ土地に来て間も無いなら知り合いなど居る筈も無い。
当然、頼る者も行く当ても有る筈も無し。

だが、少女は此処に居る。

何かしらの理由が有って、此方へ来ている。

それも、二度と故郷に帰る事が出来無いのを覚悟で。

「私は命を救われた

その恩を考えれば遠慮などしなくて良い

此方の事に慣れるまで私に出来る事は何でもしよう」

「そ、そそそんなっ！

私はただ、当たり前前の事をしただけで――」

私がそう言うのと身体の前で両手をパタパタと横に振りながら慌てる少女。

その姿があまりにも可愛く自然と口元が緩む。

少女に“笑顔”が重なる。

守りたかった――

大切な“笑顔”が。

「：そう言えば、まだ名を聞いていなかったな
私は甘寧、字は興覇だ」

そう言って意識を逸らす。

「あ、はい、私は――」

――side out

対面の女性――甘寧さんに名前を訊かれて困った。
掟で姓に当たる一族の名を名乗る訳にはいかない。
かと言って、姓が無いのも色々と考え物。

それに――

（最初に名を告げる相手はあの“少女”――）

そう心に決めている。
真名は別にしても。

「えっと、ですね……
島外に出た者は島での姓を名乗る事が出来なくて……
名も此方で最初に伝えたい人が居るんです……
だから、その……」

――「ごめんなさいっ！」

そう言っ て彼女に頭を下げ謝った。

「そうなのか…」

しかし、名の理由は判るが姓はどうなんだ？
まさか、一生では——」

「——生涯です

二度と、家族の姓を名乗る事は出来ません」

彼女の瞳を真っ直ぐに見て掟の厳しさと——
島を出る事の覚悟を示す。

やはり彼女は驚き目を丸くしていた。
だが、それは束の間。

直ぐに此方の意志を感じて納得してくれた様子。

「だが、姓名を名乗れないのは不便ではないか？
せめて偽め——いや…」

その者に会えるまでの間、仮の姓名を名乗ってみてはどうだ？」

彼女の提案に目をパチクリさせて驚く。

「…あ——そう…ですね」

あっさりと問題が解決。

考えてみれば悩む程の事はなかった。

……悩んだ本人の台詞ではないけれど。

「名前…名前…うん…」

しかし、いざ考えると何をどう考えて良いのか。

（仮の名前だし…適当？）

頭の中に浮かんだのは…

“島来” “渡夷” “島人” “渡鳥” “旅狼” など。

（……幾ら何でも、ね…）

自分の感性の無さに呆れ、苦笑してしまう。

「……思い付かないと言う顔だな」

「“仮の名前”と思うからでしょうか…

“名を付ける”という事の意味が違って上手く考えが纏まられない
みたいです」

傍らに臥せる穂輅の頭へと左手を伸ばし撫でる。

“名前”は唯一の――

自分の存在を現す言葉。

姓も、名も、字も――

真名と同様に大切な名前。

それ故に自ら名付ける事は実に難しい。

「……………飛影……………」

「え？」

「飛影、というのは？」

彼女が静かに訊く。

飛影^{ひえい}――

天を舞う鳥の影。

空を渡り行く姿。

「……良いんですか？」

「ああ」

笑顔で頷く彼女に告げる。
私を表す、その名を。

「私は飛影…
宜しく、お願いします」

袖触れ合つて

甘寧さんと出逢つて二日。

現在、彼女が仕える孫家の主城が有る建業と言う所へ向かっている。

道中の会話で判つた事は、彼女は“江賊”と呼ばれる匪賊の出身らしい。

“私が怖いかな？”と訊かれ思つ俣に答える。

島には“賊”という存在が居なかつたので書物内での知識しかない。しかし、彼女を見る限りは“賊徒”に対して書かれた善悪の定義を曖昧に思う。

（やっぱり自分の目で見て判断しないとね…）

所詮、知識は知識。

それは“常識”でさえも、“絶対の価値観”になんて成り得ない。

価値観は人各々。

全てを他人に合わせる必要なんてない。

要るのは“大別”の意識と“道德”の観念だけ。

だから、誰が何と言っても自分の彼女に対する姿勢は変わらない。

「お前は変わっているな」

彼女は一瞬だけ目を見開き驚きを覗かせたが、直ぐに目を細め穏やかに微笑む。

そんな彼女の表情に思わず姉の姿が重なった。

(…早くも郷愁?)

彼女に見えない様に俯いて苦笑を浮かべた。

甘寧 side——

“近くの村まで…”という話ではあったが…

正直、驚くしかなかった。

“賊徒”に対する警戒心が非常に低い。

知識としては知っているが現実を知らないのだ。

尤も、隔絶された島内では知る機会は無いのだろうし仕方の無い事

だ。

だが、装備も問題だ。
所持していた剣。

変わった形の物ではあるが外装を見た印象はかなりの業物だと感じさせる。

しかし、抜けないと来た。

飛影の話では祖父——長に“資格が無い”と言われたらしい。

（“資格”とは何だ？）

疑問に思わない筈もないが重要なのは別の所だ。

つまり、その剣は飾りで、今は丸腰という事。

（危機感が無いにしても、程が有るだろう…）

傍に穂輅——犬ではなく狼らしい——が居るとしても無用心だ。
武芸に関しても突出してはいない様に見える。

小さく溜め息を吐きながら放って置くと確実に死期が早まると判断。

私は飛影達を孫家に連れて行く事にした。

（文台様は大丈夫だろう
問題は冥琳様辺りか…）

自分の一存で身元の曖昧な者を連れ込む訳だ。
多少は揉めるだろう。

だが、見捨てる様な事など出来る訳がない。
絶対にしたくない。

（……らしくないな……）

彼女に見えない様に自嘲の笑みを浮かべた。

— s i d e o u t

小屋を発ってから五日。

最初の三日は山中を歩き、野宿だったので特に不安も戸惑いも無かった。

問題は三日目の夜。

その日は山間に有る小さな集落に着いた。

集落の人々は彼女の名前を知っているらしく歓迎され一夜の寢床を得られた。

それは良い。

大変、有り難い事だ。

しかし、私が出身地を口にすると異様に騒付いた。

彼女が上手く説明してくれ集落の皆も納得していた。

“何故？”と思っただが…

良く考えれば単純な事。

私達、島の者にしてみれば島外からの来訪者。

しかも、無傷での。

珍しい所ではない。

だから彼等の見せた反応は悪意の有る物ではない。

それが判るからこそ余計に戸惑うのだけだ。

(…今度から渡戸非土——夷州から来たって言わない様に気を付けよう…)

些細な一言が大きな波紋を生む事になる。

それを早い段階で知る事が出来たのは幸いだった。

翌朝、私達は集落を発ち、海岸沿いに北上した。

道中には特に珍しいと思う物事はなかった。

強いて上げるなら…

最初の三日間の道と違って海沿いを進行しているから潮の匂いがした。

あまり長く潮風に当たると髪がベタつくと姉さん達は言っていたけど…

故郷を感じられる気がして嬉しかった。

そんな感じで二日が経つ。

建安郡東冶

大きな街に着いていた。

「……人が一杯居る……」

島の九族全員の人数よりも多い人の量に圧倒される。

飛び交う声と行き交う人に呆然とする私に彼女は街を見回しながら

話し掛ける。

「此処——東治は建安郡の貿易の中心になる港街だ
漁業も盛んで、南北を結ぶ航路の重要な拠点の一つで人の往来も多
い方だ」

「多い方って…」

これ以上に人が居る場所が有るんですかっ!？」

島の内外での常識は違つと判つてはいても直ぐに頭を切り替えられ
る訳もなく、基本的に判断基準は島内の常識・現実に基づく。

「ああ、此処は大陸の中と言えば中規模になる」

「こ、これで…中規模…」

行き交う人々の波を見詰め思わず私は息を飲む。

ただでさえ大きな街なのにこんなにも沢山の人が淀み無く動き続け
る様は流水を思わせた。

あの人の流れに流されたら迷子になる自信が有る。

「…溺れるのは水の中だけだと思ってました…」

潜在的な恐怖からか…
私は無意識に彼女の袖口を握り締めていた。

甘寧 side——

袖口に感じた感触に静かに目を向けて見れば、人波を見詰めたままの飛影。

恐らくは無意識にだろう。

外套から覗く私の右の袖を彼女の小さな左手が握る。

(…随分と落差が有るな)

小屋での印象は見た目よりしっかりとしていた。

小蓮様には悪いが…

余程、良家の姫君らしいと感心した位だ。

しかし、先日の集落といい今といい…
どう見ても“普通”の娘と大差無い。

“未知”の物事に接すれば仕方無いのかもしれないが何処か“歪”だと感じる。

だが、危ういと思う反面で頼られる事、護るべき事に歓喜を抱く自分が居る。

(……拙いな……)

フツ…と自嘲的に笑う。

失った存在を、別の存在で代替えしようなどとは。何時から自分は、これ程に女々しくなったのか。

(……いや、昔からか

私まだ“あの頃”のまま…

何も変わっていないのかもしれないな……)

遠き日の記憶。

忘れる事の出来ぬ景色。

(小蓮様の時にはこんな事なかったのだがな……)

歳の頃や背丈は似ている。

それなのに彼女にだけ姿が重なるのは――

(…その境遇が故、か…)

命を救われた事…

身寄りが無い事…

歳に不相応な事…

そういった類似点が彼女に幻影を重ねてしまうのかもしれない。

自分が意識しての事ならばどうにか出来るだろう。

しかし、無意識だから質が悪いとしか言えない。

そして、自覚しているにも関わらず、心の何処かでは失った存在を、過ぎた時を取り戻したかの様な錯覚に酔って居たいと思っている自分が居る。

そんな自分に呆れる。

それでも、自分の中の欲をどうしようも無くて…
自己嫌悪に陥る。

勿論、彼女に悟られたりはしない様に注意する。

東冶や大陸の事を説明して彼女と自分の気を逸らす。

考えても良い事がないなら考えない様にするまで。

どの道、今の私ではそれに“答え”を出せない。

そう思つて視線を足下へと落とすと穂輅と目が合う。

心を見透かす様な青い瞳が私の弱さを射抜く。

“目を背け続けるのか？”

そう言われている気がして視線を外してしまった。

チラツ…と様子を窺うが、既に穂輅の視線は他所へ。

“気のせいかな…”と内心で安堵すると同時に神経質になっていると思つた。

苦笑混じりに仰いだ空は、悩みなど感じさせない程に良く晴れていた。

— s i d e o u t —

甘寧さんに街や大陸の事を聞いた後、彼女に連れられ一軒の家に入つた。

此処は“商家”と言って、物を売買する所だそうだ。

島では“売買”行為自体、また“お金”という概念が存在していない。

書物や遊戯——真似事での知識程度しかなかった。

だからつい、物珍しさから建物の中をキョロキョロと見回してしま
う。

彼女は店員と思われる人に話し掛けていた。

非常用にと幾らかの金銭を常に身に付けていたそうで此処で剣を買
うとの事。

つまり、此処に並んでいる武器は全て“商品”という事になる。

並ぶのは剣に槍に斧…

見た事のない形状の武器が陳列されている。

「どうだい？」

何れも見事なもんだろ？」

髭を生やした中年位の男がニカツと笑って訊く。
特に悪意は感じない。

「あ、えつと、今日は…」

取り敢えず、軽く頭を下げ挨拶する。

「その…見事とか…
良し悪しは判りませんが…」

一つ一つに造り手が籠めた“息吹き”を感じます……」

そう言って、右手を伸ばし指先でそつと壁に飾られた剣の腹を撫でる。

冷たく、鋭く磨かれた刃。
生命を狩る為だけの存在。

それなのに――

何故か、暖かくて……

何故か、愛しくて……

何故か、笑みが浮かぶ。

男の反応が無い事に気付き振り向く。

「……………」

呆然とした表情のまま男は目を丸くしている。

もしかしたら……

いや、もしかしなくても、自分は“また”、変な事を言ってしまったのかも。

どうしようかと悩む。

「私の連れに何か？」

其処へ甘寧さんが来て男に声を掛ける。

同時に私を背中に庇う様に身体を滑り込ませた。

「あ…ああ、いや…」

男は我に返ると腕を組み、甘寧さんを見た。

「……私に何か？」

表には出していないけれど甘寧さんの雰囲気鋭さが滲んでいる。

「……アンタ、剣を買いに来たんだっただな？」

「…そうだ」

「見た所、アンタの力量はかなりのもんだ
店内に眼鏡に敵った獲物は有ったかい？」

彼女は僅かに黙し、静かに首を横に振った。

「元々、間に合わせの剣を探していただけだ
それに手持ちも少ない」

その言葉を聞き、男は目を細め此方を見詰める。
そして、何かに納得してか一人頷いていた。

「一つ、頼みが有るんだが聞いて貰えないか？」

袖触れ合うも（後書き）

主人公に関してですが…

名前は飛影^{ひえい}。

仮名になります。

白に近い白金の長い髪。

左が蒼、右が紅の双異眼。

体軀はちっさ可愛い。

【ネギま！】のエヴァ譲を参考イメージに。

穂輅は狼です。

白狼です。

犬じゃ有りません。

大きさは高さ70位で、全長は190位。

内、尻尾が50位。

二人のイメージは…

【もののけ姫】…かな？

もう暫くは三人？旅です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1006s/>

恋姫異文録 魏史陽影紀

2011年6月4日01時22分発行